

日本プロテスタントキリスト教史における説教 ——コミュニケーションとトランスフォーメーション——

山口陽一

はじめに——継承すべきこと

日本福音主義神学会は、これまで「説教」についての多くの研究を重ねてきた。1985年の福音主義神学会第三回神学研究会議は、「福音主義の聖書解釈と説教」を「神のことばの釈義であり、神のことばの説教である」と確認した。そこでは福音主義の聖書解釈をめざして「歴史的・文法的・批評的解釈と説教」、「釈義から説教における聖霊のはたらき」、「教会における釈義と説教の位置づけ」が論じられている¹。そして翌年の『福音主義神学』17に、津村俊夫「福音主義の聖書解釈——その方法論の確立をめざして」、宮村武夫「聖書解釈の基盤と方法（論）をめぐる」が掲載される。さらに12年後の『福音主義神学』29には、藤原導夫「説教と聖霊——スボルジョンの説教における聖霊の力について」、内田和彦「新約聖書釈義から説教へ」、金田幸男「日本キリスト改革派教会の説教」が掲載され、第三回神学研究会を継承発展させている。

今回の神学会議が「説教 コミュニケーション（伝達）&トランスフォーメーション（変革）」をテーマとするにあたっては、福音主義神学会のこれまでの研鑽を継承して「聖書、聖書解釈・聖霊・教会」を前提とすることをまず確認すべきである。すなわち、福音主義教会における説教は、神のことばである聖書の説き明かしであり、靈感された聖書は召命を受けた説教者によって聖霊の

¹ 丸山忠孝「第三回神学研究会議 総評」『福音主義神学』17（1986年11月）

働きの中で会衆に語り明かされる。神のことは説教としてすべての人に語られ、罪人を悔い改めとイエス・キリストへの信仰に導き、神のこゝばを聞き分ける人々が生まれる。ここで説教は、教会形成と神の国の実現をめざすことになるが、もとより聖書は教会に占有されるものではなく、神の民をこの世から呼び出すことばでもあり続ける。説教とは、神の召命を受けた人が教会によって立てられてすべての人に語りかけることばであり、神によるコミュニケーションとトランスフォーメーションの仲立ちである。

説教には、釈義、伝達、変革という要素があると考えられる。釈義は、古代に記された神のこゝばを現代において理解する作業である。伝達は、神から人を介して人になされ、ここにコミュニケーションが生じる。説教者は正しい釈義に力を尽くし、これを可能な限り自らの経験としつつ、会衆に適用するよう熱誠をもって伝達する。一義的にはここまでが説教者の責任であり、悔い改めと回心・戒めと慰め・神の民である教会の結集と成長、社会の改良などの変革（トランスフォーメーション）は、聖霊の働きに待つべきものである。神のこゝばが正しく理解できるように伝達されたにも関わらず、聴く者に変革が起きないことは有りうるからである。とはいえ説教者は、会衆のトランスフォーメーションを期待しないで説教することはない。ゆえに釈義と伝達に加えて変革を説教の課題と考えることができる。ちなみに、変革には大小広狭さまざまあるが、ローマ12章2節で「心の一新によって自分を変えなさい」と訳されるメタモルフォーオー（μεταμορφόω）はその核心である²。

今回、福音主義神学会が説教における「コミュニケーション&トランスフォーメーション」をテーマとした背景には、福音派教会における1995年頃からの教勢停滞、伝道、特に青年伝道の鈍化、社会に与える影響力の低下などが意識されていると思われる。ここでは説教者から会衆へのコミュニケーション（伝達）の現状、課題、対策などが主なる関心事として取り扱われることになるであろう。時代の変化と世代の変化に対応することが説教の重要な使命なのであるから、この努力を怠ることは許されない。ただし、その前提としての釈義も

² μεταμορφόω は、主イエスの変貌のところで「御姿が変わり」（マタイ17章2節）、IIコリント3章18節では「榮光から榮光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます」と用いられる。

神の語りかけを聴き取るという意味でのコミュニケーションがあり、これが疎かになってしまつては、説教者と会衆とのコミュニケーションは意味をなさない。つまり説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションは、釈義から説教までの全体に関わる課題なのである。

日本におけるキリスト教史から、釈義から説教における伝達と変革を検討するという課題は、福音主義神学会から私に求められたものである。そこで「コミュニケーションとトランスフォーメーション」というテーマを意識しつつ、日本のプロテスタントキリスト教史における説教について歴史的に検討することにする。

I. それぞれの説教力——明治維新から大正デモクラシーまで

人は耳新しいことを聴きたいものである。さらに、禁じられているとなればますます聴きたいのが人情である。幕末から明治維新期のキリスト教の説教は、250年にもおよぶ禁教迫害とそこで擦り込まれたキリシタン邪宗観に凝り固まった人々に対してなされたのであるから、困難であったことは言うまでもない。しかし、その一面で人々の関心は極めて高く、これはコミュニケーションのためには好都合でもあった。

1875年に、法典長老教会の安川一がD・タムソンから教えられた『宣教心得』は、我が国における「説教」のさがりけである。説教は文字通り宣教であった。タムソンは適切な「題」（聖書箇所と主題）の選択を最重要とし、実践的に「宣教」の方法を伝授している³。説教者たちは自らが会得した新知識として文明や宗教を語り、野蛮な偶像礼拝を去って真の神を信すべきことを自信を持って語った。この時期の説教における「説教」と「宣教」の同義性、また「体験と自信」は特筆してよい。当時のことばでは「信仰の実験」と表現され、内村も植村もよく用いている。これに教える身分としての士族の意識、人に先駆けて新知識を身に付けた知識人の自負が加わると、いよいよ説教は強い影響力を発揮した。

³ 翻訳筆記『宣教心得』、船橋法典の安川厚家所蔵

1) 最初の日本人説教者奥野昌綱

J・C・ヘボン は 1877 年 7 月 11 日付書翰において、住吉町（横浜指路）教会における日本人の説教者について以下のように語っている。

「日曜日の日本人教会の説教は、東京から来た日本人の教職、戸田と高橋両君⁴の援助を得ました。交互に安息日に教壇に立ち、それだけわたしの仕事は軽くなり、わたしは時々しか説教いたしません。これら両君は立派な人物であり、立派な説教者です。弁舌さわやかで、堂々たるものです。だからわたしは両君を手離したくないのです。彼らも多くのところで説教しているからです。横浜の教会の長老はいつでも説教はできませんがあまり上手とは申せません」⁵

1877 年 10 月、日本基督一致教会の設立に伴い小川義綏、奥野昌綱、戸田忠厚は日本で最初の牧師に抜手された。韓国での牧師抜手は 1907 年であるから日本が 30 年早い。ここではその中の一人、奥野昌綱の説教について考察する。

奥野は 55 歳、文政 6 年 4 月 4 日、御徒土町において徒士の竹内家に生まれ、文武を修めた人である。槍術、笛・笙、狂歌や漢詩、特に和歌に勝れた多能多芸の人であり、弘化 4 年、25 歳で奥野家の婿養子に迎えられたが明治維新で一切の資財を失い、1871 年小川義綏の紹介でヘボンの日本語教師となった⁶。ヘボンの『和英語林集成』改訂の助手を 8 ヶ月務め、ヘボンが同書再版のため上海に赴いた後はブラウンの聖書翻訳の助手となった。ここにおいてヘボン、ブラウンは最良の日本語教師を得た。奥野は聖書翻訳を手伝うことで魂を耕され、バラの「ペテロの拒絶」と題する熱誠溢れる説教によって回心し、1872 年 8 月 4 日、日本基督公会においてブラウンから洗礼を受ける。50 歳の時であった⁷。

⁴ 戸田忠厚と高橋亨（安川亨）と思われる。高橋は五郎の可能性もある。

⁵ 岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009 年、340 頁

⁶ 奥野についての記述は、黒田惟信『奥野昌綱先生略伝並歌集』（一粒社、1936 年）による。本書は奥野からの聞き書きである。幕末、彼は慈性法親王家、公現法親王家（後の北白河宮能久親王）に仕えた。

⁷ 全国で 27 番目。ブラウンからの受洗は、他に井深罷之助、眞木重遠への例があるが稀である。

その後、奥野の学識は、漢訳の旧新約聖書、『天道溯源』、『格物探源』、『ファールの『馬可伝講義』等の訓点本出版において遺憾なく発揮される。それと共に、彼は説教に力を注いだ。1872 年のクリスマスにはバラの自宅で「言ひ尽されぬ神の賜」と題して語り、バラから銀時計をもらっている。翌年の初週祈禱会では「聖国を臨ませ給え」という初めての説教をしている。この年長老に選ばれた彼は伝道に燃え、2、3 年はペテロの悔改めを語り続けた。奥野の弟子の黒田惟信は言う。

「固より先生の説教は、長きに失するの弊があり、又朗読説教にて、自然に其語法も文語体に傾き、稍や堅苦しい嫌があったけれども、その得意とせる『ペテロの失敗』を始めとし、『バルテマイの救』、『蕩児還父』及び『筐中のパウロ』等の如きは、何れも皆先生の経験を通過して出づる生命の水の如く、津々として妙味の尽きざりたる者があったので、余り文字のない聴衆であっても、決して倦怠の色を現さなかった」⁸

越前で一年間の教鞭を取り終り横濱に帰ったグリフィスは、奥野の放蕩息子⁹の説教を聴き「わたしは心を奪われた。日本語というものは、説教者自身がたしかに聖霊に満たされるように、聖霊によって十分に満たされてきたように思われた」と感嘆している⁹。

牧師となった奥野は、麹町教会（1877 年 11 月～82 年 3 月）を皮切りに約 30 年牧会伝道にあたり、隠退後は三度の巡回伝道を行っている。彼は晩年に至るまで原稿に改訂を加え、一篇 2～30 枚の説教 2～30 篇を一巻として三巻の説教集を作り、さらに改訂を加えた一巻千枚の説教集を二巻携帯していたという¹⁰。伝道心に燃える彼は、説教の学びと実践の間で悩んだ時、ブラウンから両方せ

⁸ 黒田惟信『奥野昌綱先生略伝並歌集』一粒社、1936 年、103 頁

⁹ W・E・グリフィス・渡辺省三訳『われに百の命あらば』キリスト新聞社、1985 年、195 頁

¹⁰ 奥野の説教原稿について黒田は、最初の合本 3 巻と初稿の一篇一冊のものは門生知人に分与され自身もその一巻を秘蔵していると記している。国際キリスト教大文化研究委員会編『日本キリスト教文献目録—明治期—』1965 年には、「A0113 奥野昌綱説教集 稿本 4 冊 新栄教会」（6 頁）の記載があるが、現在、新栄教会にこの稿本はない。

よと教えられたことを心に留める。「わたしはあのときからあなたの言葉に従って一勉強しながら説教し、説教しながら勉強を続けています」¹¹。日本プロテスタント最初の説教者のとどまるところを知らない説教研鑽と伝道の熱心を心に刻みたい。奥野の「経験は濾過して出づる生命の水の如く」という説教は、当時の説教者に共通のことと思われる。これに加えて奥野が原稿に手を加え続けたことが「余り文字のない聴衆でもあっても、決して倦怠の色を現さなかった」というコミュニケーションを成り立たせていたと思われる。

1882年にカラカワ旧ハワイ国王が横浜海岸教会を訪れた時、遅れた到着を待つ間に乞われて説教を始めた奥野は、元国王が到着しても説教を止めず、止めさせようとすると人々に憤激して言った。「兄弟よ、姉妹よ、縦令、国王の臨御たりとも、自分は天地万物の主宰にまします真の神さまの御話を致して居るに、このさまは何事ぞ、よしよそれでは、私もこれより退場いたします」¹²。生来の短気でもあるのだが、日本最初のプロテスタント牧師は、伝道の熱心と共に、説教とは天地の主宰者たる神のことばを宣べることと弁えていた。これは説教権に関わることであり、「神によって、神の御前でキリストにあって語る」(II コリント 2 章 17 節) 自覚として現われる。奥野にはこの自覚があったことがわかる。

2) 日本のプロテスタント教会を形成した説教

開化期の説教には、神のことばを聴くために整えられた会衆がいるわけではない。説教は常に伝道説教であり、説教中にヤジが飛ぶこともめずらしくない。娯楽の少ない時代に野次馬のような会衆を前にして語る説教は、皮肉にもコミュニケーションの要素を多分に有していた。会衆を引き付ける力がなければ誰も聴いてくれないからである。アメリカで会衆派の説教者として訓練を受け、1874 年と 1876 年に帰国した新島襄と澤山保羅は、存在そのものが文明開化、新知識の充満であり、何をどう語っても効果抜群であった。士族と平民という身分の違いは、士族が學問をして教える役柄であっただけに語る力に現われた。

¹¹ グリフィス前掲書、197-198 頁

¹² 『植村正久とその時代』第 2 巻、教文館、1976 年復刻再版、195 頁

また、昨日まで同じ生活をしていた仲間が回心により一変した生活の証しとして語る言葉にも説得力があった。1881 (明治 14) 年に大阪心斎橋で売られれた排耶番付表「耶蘇退治馬鹿のしんにゅう」には、「説教の二字を削られる耶蘇徒」、「耶蘇法を聞いたおとり身体ハ天へ上るといふ奴」、「耶蘇教を飯も食わずに聞に行く奴」、「耶蘇物語を聞に角の芝居へ詰かける奴」等、キリスト教の説教を揶揄する言葉が見られ、裏を返せば当時の説教の隆盛とこれを聴く人々の様子を示している¹³。

靈南坂教会で東京の知識層の心をとらえた小崎弘道の説教は、時代に対する敏感さや知識の広さを感じ、いかにも主張明瞭で手慣れている。小崎は『日本帝国の教化』¹⁴の第三章「我等は何を説く可き乎」二節「説教の特徴」において言う。

「説教は福音の宣伝であって、講義や演説とは全く其の目的を異にするものである。(中略) 説教は単に自己体験の真理を説くのみでなく、神の啓示を受けてこれを伝えねばならぬものである。(中略) されば私共は、先づ自らよく聖書を研究し、キリストの救いを体験し、神の霊を受けて其大事業を適切に伝ふることが肝要である。説教者に最も大切なものは、其の人格であるのはこれが為であって、多くの場合、説教の影響の大小深淺は、其の人の人格の直接なる反映なることを見る」

続く第三節において小崎は「近時流行の説教」に触れる。そして倫理的宗教、社会的宗教、新神学の福音を否定し、第四・五節において「神の愛」「キリストと其の十字架」を力説して言う。

「私共にして、生けるキリストを偕にあるの確信を以て、常にキリストと其の十字架を主題として講壇に立つ時は、所謂鬼に金棒で、如何なる大敵にも打ち勝つことが出来、今日の教勢を一変し得ることは疑ふ可らざる所である」

同じく組合教会の元老と呼ばれ大阪の庶民の心をつかんだ宮川経輝は「余は説教の為に聖書を読む事は避けるようにして居る」と言う。毎朝半時間の聖書研究を重ねて巻中の記事については囊中のものを捜るがごとく精通し、説教に

¹³ 大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館、1979 年、口絵

¹⁴ 小崎弘道『日本帝国の教化 (日本基督敎伝道論)』1929 年、『小崎弘道全集』第 2 巻、警報社、1938 年

おいては次から次に浮かんでくる聖句の中から会心の聖句を取り、これについて原語の意味を調べ、各種の訳を参照し、二、三の註釈をあさる。それから思索に取りかかり、およそ伝えるべきメッセージが定まれば当分潜在意識のほうに片づけておく、そして聖日の朝、骨子を書こうと筆をとれば四、五十分で書き終わると述べている。要は、説教や訓解のために聖書を読まず先ず己が靈性の為めに聖書に親しむべきであるということであり、「聖書の説教をなさうと思へば自ら聖書の人となる外はなからう」¹⁵。これが宮川の真骨頂である。

本郷教会の海老名弾正はスケールの大きい観念的な説教で日本の知的エリートを魅了した。彼らは、聖書本文の釈義説教ではなく自らの体験や見識、宗教思想を語ることに於いて会衆をとらえた。ヨハネによる福音書4章42節の「神は靈なり」を主題とする説教「わが活ける神」において海老名の思想は縦横無尽に駆け巡る。天地がだんだん進化発達してゆく間に「心力」として人が現われた。「心力」の最も大いなる働きが「道義心」である。イスラエルは「道義心」によって建国し、日本は大和魂によって建国した。これまた「道義心」である。預言者の崇拝したところの神は「道義心」であり、この「道義心」が一大なる人物となって出てきたのがイエス・キリストである。人類の最も立派なところの精神をもっている者はキリストであり、キリストは人類の精神である。キリストが人類の魂であるから、私どもはキリストを信じなければならぬ¹⁶。

海老名は有為の青年たちに大志を抱かせたが、聖書観においても神学的にも大きな問題がある。この時期、最も霊的な人物と評価された海老名は、「靈的」という評価の危うさを教えてくれる。自由主義と靈性、ナショナルリズムと靈性は共存できるのである。後で述べるように、戦後の福音主義教会の釈義的説教はこの点を修正するものである。

日本基督教教会の説教者としては植村正久について考察する。宮川が「日基派の牧師達は用意周到字を積み句を拾ひ、醇々として説き、懇々として語る」¹⁷と

¹⁵ 宮川経輝『牧会百話』警醒社、1915年、第24話「無尽の説教資料」、第25話「聖書の説教に付て」

¹⁶ 日本組合基督教教会の説教については、山口陽一「日本組合基督教教会の説教」『説教で何が語られてきたのか』いのちのことば社、2003年

¹⁷ 宮川経輝『牧会百話』第22話「説教の流派」

評する日本基督教教会の説教者を育てたのが植村である。同教会の伝道の独立のために獅子奮迅の働きを続けた植村は、1925年に召されるまで伝道者としての生涯を全うする。当時の伝道者が甚だ強烈な伝道心を持ち、説教はすなわち伝道だったことは銘記しておかなければならない¹⁸。

富士見町教会には植村の説教に聴きに多くの若者が集い、1921年には会員数が1,739名に達した。正宗白鳥、国木田独步も植村から洗礼を受け、衆議院議長にもなった片岡健吉、中島信行らの有力政治家たちも礼拝に連なっていた。彼の説教は、時代の思潮に最も敏感な知的若者だけではなく、時代を代表する文人、政治家たちにも多大な影響を与えた。

斎藤勇は植村の説教を「訥弁の雄弁」と評している¹⁹。1879年の按手礼試験の折、植村の説教を聞いたヘボン氏は「今の説教は解らぬ、伝道者には不適当」としたが、稲垣信が「植村君は伝道することが好き、説教が好きだ」ととりなして合格となった²⁰。

小野村林蔵はその説教を評して言う。

「説教に肘を突いて、音声は濁り、語尾はもつれがちに、ぼつりぼつり語り出す先生に聴いては、その聴きづらさから、大方の者が先生を訥弁だとしてしまうのも無理ではない。だがひとたび情動き、意然来たるなら、堂を圧する熱弁は、機鋒鋭く礼拝者の胸を貫き、快ならねども雄、爽ならねども烈、一大雄弁は満場を魅了して、感動堂に満つるものがあった。(中略)先生の説教は、奇知を用いて人を衝くよりも、正道を進んで正面から人に迫ろうとする風があった」²¹

¹⁸ 植村は、東京山手から郊外の市ヶ谷教会、青山教会、千駄ヶ谷教会、大森教会、白金教会、洗足教会の建設に協力し、1877年の高崎以来、死の前年の中国・九州巡回に至るまで47年間、伝道のために東奔西走した。1902年から1920年の間に台湾に10回伝道旅行し、1909年から1923年の間に9回、朝鮮・満州を訪れ、1921～22年には3回中国に伝道している。

¹⁹ 斎藤勇「説教家としての植村正久」『思い出の人々』新教出版社、1965年、230頁

²⁰ 植村正久「任職満三十年記念会に於て」『植村全集』第8巻、340頁

²¹ 「植村先生の説教」『小野村林蔵全集』第1巻、新教出版社、479～490頁

山路愛山も「(演説は) 岩を破って水を出すようなる訥弁なり。聴いて居ながらもどかしくなる様な訥弁なり。さりながら其訥弁の中に氏の天才は閃きて時として雲間に神龍の片鱗を見るが如き感なきに非ず。善く聞く者には生涯忘れ難き印象を与ふ」と言っている。

植村は、明治時代においてすでに「講壇の調子の衰え」を嘆じて言う。

「美わしき説教や面白き説教はこれあらん、されど真に人の心奥に迫って悔改を促し、そのうなだれたる^{たしい}霊を励まし、憂え悲しめる者に限りなき慰藉を与うる力あるものは稀なり。その原因は要するに説教者自ら熟するところなく、ことに主眼せんとする思想を懐かず、深く罪惡と戦いてこれを悔改するの経験乏しく、キリストの恩寵に生活するの味わいを知らざる者多きに在りと言わざるべからず」²²

説教において重要なのは、悔い改めと恩寵の経験から主張すべき思想を熟をもって語るということであると言っているのである。ここに植村の説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションの力があるということであろう。ノックスの口述を筆記した『説教大意』²³が「救神学校の教科書として出版されたのは1886年のことである。ノックスは米国説教教師約翰孫(ヨハンソン)の講義に手を加えてこれを講じ、序文には「我基督教ノ説教ハ、教義ヲ説明シ、基督ノ榮光ヲ顕彰スルヲ以テ宣教師ノ眼目ト為ス者ナリ」と記している。

1888年7月から12月にかけて江藤書店が『説教演説集 反響』(1~6号)を発行し日本人説教者26人の説教を掲載した。これは超教派説教集の先駆けである²⁴。各教派の説教者たちが名前を連ねるだけでなく、1~5号にはムーディー

²² 『説教者の心構え』『福音新報』第226号、明治32年10月25日(『植村正久著作集』6、342~343頁)

²³ 裏維納屈(George William Knox)口述・歴山石川筆筆記『説教大意 全』米国聖教書類会社出版、明治21年5月

²⁴ 収録された説教と説教者は以下の通り。「剛健なるべし」稲垣信、「無覚の感化」小崎弘道、「聖書の友年会演説」本多庸一、「必靈上の境遇」伝道者に欠くべからざる三知識「伊勢時雄」、「世に於ける基督信徒」中村尚樹、「己を知れ」奥野昌綱、「基督ハ万民の模範」田村直臣、「信仰の善戦」井深梶之助、「キリスト教育の要性」伝道上の感慨を述べて同志社明治学院学生諸氏に望む所あり」星野光多、「基督の愛我等を励ませり」田井正一、「己に克つ」小川義綏、「潔白なる生行」山本

の説教が一編づつ収録されており、日本のプロテスタントが総力を挙げて日本人に語っているという印象を受ける。教会も説教者もまだ少ない時代に、筆記したままの口語体でより多くの読者に説教を届け、反響を期待するという試みであった。

3) すべての人に語ることをめざして

戦前の日本においては連続講解説教という説教の仕方はない。そればかりか本文の釈義を中心とする講解説教自体がまだ成立し得ていない。植村正久の説教は概ね講解説教であるが本文の扱いはかなり臨機応変である。そうした中で制度的な教会を否定して聖書講義を続けた内村鑑三は、その教会観と聖書観に基づいて制度的ならざる教会のために「説教」をしたと言えよう。制度的な教会を形成することを顧慮しなかったゆえ、教派の教理でなく、修養倫理でもなく、聖書そのものの講義をしたことは内村の思想にふさわしいと言える。そして歴史的教会に連なることを拒否したゆえに、既成教会の枠を超えた聴衆と説教者を得ることになった。こうした聴衆のために『聖書之研究』を書かれた「説教」として機能させ、これを「天職」と考えたのが内村鑑三であった。

内村鑑三の『聖書之研究』を「平民」(庶民)に提供しようと試みたのが山室軍平の『民衆の聖書』である。山室は、制度的教会の枠を超えたキリスト教社会運動体を背景に社会に躍り出てキリストの愛を実践する。すなわち救世軍という信条も聖礼典も持たない「教会」の説教者として、また社会事業という実践をもって、内村同様、教会の枠を超えてすべての人に届くように説教をした。我々は「ロマ書の研究」により内村が聖書を連続的に講解したように印象づけられているが、必ずしも一書の連続講解にこだわっているわけではなく、実際には部分的な連続講解が多い。また、彼は、「信仰の実験(体験)」を重視し、

秀雄、「我儕も暫なる乎」木村熊二、「将来の基督教(其一〜其三)」松村介石、「説教者の自戒」宮川経順、「救拯」加藤寛、「基督教の感化」栗原宗次、「人は二人の主に従ふること能はず」松山高吉、「基督の十字架」石原保太郎、「福音の証者」三浦徹、「人類の起源」和田秀豊、「新日本青年の境遇」坂野嘉一、「雲外の光」小林光泰、「伝道の急務ハ今日に在り」古莊三郎、「社会の道徳」元良勇次郎、「信仰と道理」小方仙之助。宣教師はフルベッキ、ミラー、スカッタル、デフォレスト、カックラン、そしてムーディー。

聖書を自らの歴史的状況の中で直感的に受け止めて解釈する。これが単なる主観に流れなかったのは堅実な注解書を用いていたからに他ならない²⁵。

山室軍平は14歳で岡山から上京し、1888年に築地福音教会で洗礼を受ける。と、伝道に燃え活字棚にひれ伏して祈った。「(略)此等の職工・労働者、其の他一般の平民の救いのために働かせ給へ。即ちどんな無学な人でも、聞いて解るように福音を伝え、又どんな無知な人でも、読んで解るやうに真理を書きしるす者とならせ給え」(『私の青年時代』²⁶)。

山室軍平は、その影響力において類稀な説教者であり、その資質は青年時代からのものであった。同志社時代に山室を支援した吉田清太郎は高梁における夏期伝道にふれて言う。「山室君はその頃から説教が上手でありました。その説くところは平易明白で、而もよく人を感動させて居りました。私はこの青年は行末日本のムードーとなるべき人であると思ひました。」²⁷

平山照次は言う。「満場の会衆。身動き一つせず聴き入る会衆。息詰まるような満たされた空気。私は学生時代山室軍平先生の御講演を拝聴する毎に深い感動を覚えたものである。半ばかすれたようなお声。殆どジェスチャー一つ使わず、直立不動の御姿勢で、こんこんと湧き出る泉のように、小止みもなく語り続けられる平明なお話。一つの真理を断言命題で語ってから、すぐ引続いて実例をもって行き、又、実例が済んでから、結論的命題をそこから引き出す、という具合に、巧みに展開される御講演は、全会衆を引きつけずにはおかなかった」。聖公会主教の村尾昇一は山室の説教の力を以下のようにな分析する。「山室軍平の特質はそのオリザナリチャーにある。人物の貧困がだんだん激しくなってきた。キリスト教界で、ある人が『今のキリスト教界で、われわれがその人の言葉、その人の説教を聞きたい人をあげるとすれば、それは誰であらうか』と聞いた時、衆口一致で『それは山室軍平』ということになった。山室軍平はその説教も、その著述も、ともに彼が『考へ』『経験し』『確信した』ものの表現であっ

²⁵ 関根正雄『内村鑑三』(清水書院、1967年)によると、内村が用いた主な注解書はH.A.W.マイヤー、F.ゴードン、J.A.ベンゲル、F.A.G.トールック、J.フオスタなどである。

²⁶ 三吉明『山室軍平』吉川弘文館、1971年新装版、35頁

²⁷ 三吉前掲書、48頁

た。『ということである』というのではなく、全生命を打ち込み、彼の全責任においていわれたところのものであった。「平民の福音」は、彼の説教そのものであり、書かれた説教としても多くの人に受け入れられた。福音に生きる者のリアティーが彼の説教の力と言える。

4) 説教における聖霊の働き

B・F・バックストンは、1860年イギリス生まれ。父は、貴族で個人銀行を経営し、CMSの会計を担当していた。ケンブリッジを卒業後、1882年にムーディーの影響で「救いの確信」を得、1885年には「きよめ」を経験し、1890年にCMS宣教師として来日、松江を拠点に教派を超えた若者を、聖霊による「きよめ」の信仰に導いた。

バックストンは、聖書を離れる傾向を有する聖霊派ではないが、その説教は歴史的文法的な釈義に重点をおいていない。また教会形成に関心がなく、説教の目標は個人の回心と聖霊による「きよめ」に集中する。ここで注目するのは説教における徹底的な祈りの重視である。

「聖霊はいつでも神の言と共に働き給うことを見ます。聖霊は単独で働き給いません。いつでも神の言と同時に働き給います。聖霊は神の言なくして働き給いません。この二つはいつでも一緒に働きます」²⁸

そして説教と共に祈りを重視して言う。「どうぞ、説教と一緒に祈りを致しうございます。説教よりも、むしろ祈ることを務めとうございます」²⁹。「祈ることは神のことばを語るよりも大切なことです、これが一番大切なことです。聖別会の時に一番必要な兄弟は、よく神のことばを語る兄弟ではありません。よく祈る兄弟です」³⁰。「説教の番に当たっていないくても、出て行って祈りなさい。祈る者が説教する者よりもよい働きをすることは、しばしばです」³¹

²⁸ バックストン (堀内文一筆記)『創造と墮落』バックストン記念霊交会、1901年、21-22頁

²⁹ バックストン (堀内文一筆記)『赤山講和』1900年、103頁

³⁰ 『バックストン説教集』関西聖書神学校、1987年、61頁

³¹ バックストン (小島伊助訳)『信仰の報酬』バックストン霊交会、1956年、121頁

説教者が説教している間、神のことが伝達され効果を生み出すように祈る人がいるのである。そして説教のために祈る人は、説教者よりも必要だと言うのである。説教を人と人との事柄と考えていてはあり得ない認識である。この点においてバックストンの説教観には驚かされる。積義的な説教の準備において、それと同等に祈り備えるべきことを教えられる。

説教の課題としてコミュニケーションとトランスフォーメーションを考えるとき、このことを見落としてはならない。つまり、聖霊は書き記された聖書を悟らせ、またこれを聴く人に届け給う方であるからである。

II. 説教の敗北——戦中戦後から現代

ここでは教会を形成する説教、すなわち礼拝の民を整える説教の挫折とその再建を考える。説教におけるコミュニケーション&トランスフォーメーションという課題は、すぐれて時代への適応に関係しているが、その適応における危うさを歴史から検証しておきたい。

1) 昭和前期の日本の説教

日本におけるプロテスタント宣教の歴史において、最も盛んな伝道が行なわれたのは20世紀初頭の30年間である。「教育と宗教の衝突」論争とアジア太平洋戦争に挟まれたこの期間、20世紀大学伝道から神の国運動まで、各派が協力してすべての日本人に福音を届けようと励んだ。その結果、信徒数は1900年の3.7万人から1925年の17.8万人に増加する。国民感情との衝突が融和へと変わり、都市労働者が増え、ミッジョン・スクールが續々と設立され、大正デモクラシーを追い風に伝道は伸長した。こうした時代を映す説教集として、昭和初年の『我等の教壇——二十五名の説教』（教文館、1926年）³²と、日中戦争勃発の年の『時代と教壇——現代基督教説教集』（新生堂、1937年）を考察する。

³² これは1925年の説教を収録したもので、教界の世代交代を感じさせる。古い世代の説教は小崎弘道「宗教家の使命」と宮川経輝「基督の活教訓」のみで、各教派の55歳から63歳の指導層が名前を並べる。メソヂストの鶴崎庚午郎「天の父」、バプテスタの千葉勇五郎「歓喜に満ちて」、日本クリスチャン教会の松野菊太郎「贖

『我等の教壇——二十五名の説教』は、関東大震災後の危機を孕む時代を背景にした説教集であるにもかかわらず、新鮮さにも迫力にも欠ける感がある。但し、丁寧に洗練された説教であるという意味においては、「BEST JAPANESE SERMONS」という英語表題の通りである。一例を挙げれば、高橋卯三郎の「人生の分数的観察」は、レプタ二つを捧げた女性の記事の釈義に基づき、彼女は持っているものすべて、すなわち2分の2を捧げたことに注目し、分子が分母に等しくなるような献身を促している。釈義を生かしたわかり易い説教で印象的であり説教題も興味を引く。しかし、説教の迫力とスケールは、明治期に比べると減じたように思われる。『教育と宗教の衝突』において井上哲次郎は、国体と衝突するキリスト教を批判し、「以後は出来得べき丈、我邦の風俗に同化し、其非国家主的精神を排除して、専ら個人的倫理を維持するの方針を取るべきなり」³³と語ったが、この説教集から受ける印象は、その通りの信仰の個人化と内面化である。

メソヂストの今井三郎「霊と能との福音」、日本基督教教会の高倉徳太郎「生命と恩寵」と金井為一郎「基督の死と人生」、日本組合基督教教会の海老沢亮「理想的教団の建設」、日本基督教同胞教会の矢部喜好「基督教と忠孝」は、40歳前後となった気鋭の教師達の説教である。特に高倉の説教は、格調高く神学的な強固さにおいて抜きん出ている。末尾の一節を紹介しよう。

「自己をみつめること、自己の生命をうちに直視することは、真実なことであり、たふといことである。然しこれだけでわれらの精神問題は決して解決するものでない。われらは自己を見つめる眼を上にもむけなければならぬ。仰いで神の聖顔を見つめねばならぬ。下向ける魂はいかに真実であっても、まことの生命に徹することはできない。上を向け、神を求めよ、キリストの顔に直面せよ。救いは上より。いまの世に最も欠けたるものは仰ぐ心だと信ずる。人間的なもので、凡てを掩うてしまつて、神的なもの、前にひれ伏す厳肅な心を、天

罪的奉仕」、自由メソヂストの河辺貞吉「汝は何処に居るや」、ホーリネスの中田重治「主の證人」、日本美普教会の酒井長吉「幻滅の悲哀と信仰の勝利」、ルーテルの瀧本幸吉郎「人生と宗教」、近江兄弟社の高橋卯三郎「人生の分数的観察」などである。

³³ 井上哲次郎『教育と宗教の衝突』敬業社、明治26年、5頁

を畏る、心を今の若き心は失うてゐる。人間礼賛は自己礼賛となる。センチメンタルな弱き心を追ひはらへ。自己実現、自己完成がわれらのライフ・プリンシプルだといふか。これはよいことであらふ。しかし人生究極のプリンシプルは、礼拝にあり、犠牲にあり、十字架にありと念ふ。」

高倉の説教は、明治期の倫理的・修養的キリスト教が恩寵の宗教として深まったことを実感させる。一方、やがて日本基督教連盟の総幹事として日本基督教団合同を推進する海老沢亮、かつての良心的兵役拒否者矢部喜好の説教には、時代への同調の傾向を感じることも確かである³⁴。

次に、『時代と教壇——現代基督教説教集』であるが、これは50人の説教を連ねて壮観である。日本の説教はいよいよここまで洗練されたとの感慨がある。富田満の説教「子とせられたる者の霊」は、ローマ人への手紙8章14-17節からのもので、表現を現代的にすれば今日でも立派に通用する名説教である。多田素の「使命の自覚」(ルカ4:16-21)は、当時の神社参拝推奨の風潮を懸念して言う。

「君に対して忠ならずとか、国体に悖るとか言われるから、まああと調子を合す誘惑を感じる。だが我々の使命は右にも左にも曲げられてはならない。此唯一の神を紹介する事、之を我々は神から托されてゐるのである。」

まさに「時代と教壇」にふさわしい説教と言える。主流派の教職、それも本格的な神学的訓練を受けた人々の信頼に足る説教は、概ね戦争の時代に迎合するでもなく聖書の真理を丁寧に語っている³⁵。ただ、同時期の朝鮮において神

³⁴ これ以外の9編は以下の通り。東北学院神学部教授の梶原長八郎「基督教道徳の根底」、バプテストの中島力三郎「基督教者の自重」、メソヂストの宮澤六郎「山上のイエス」、日本同胞教会の安田忠吉「キリストの愛我等に迫れり」、メソヂストの波多野伝四郎「宗教的生命の体験」、メソヂストの堀峯橋「土器に盛れる宝」、バプテストの渡部元「石叫ぶべし」、日本組合基督教会の額賀鹿之助「文明の矛盾と宗教の復興」、萬木源次郎「国民訓と宗教」

³⁵ 秋月致、日高善一、福田正俊、今村好太郎、亀谷凌雲、金井為一郎、三吉務、村田四郎、小野村林蔵、斎藤敏夫、霜越四郎、多田素、植村環が、どれをとっても味わい深い確実な説教をしている。日本組合基督教会からは9名、同教会最初の女性牧師である長谷川初音は、マタイによる福音書26章14節のナルドの香油の場所から「壺を破る者」という説教を寄せている。壺を破った女性のことを同

神社参拝強制に対して説教していたイエス教長老教会の牧師達、あるいはバルメン宣言に拠って神のことばの説教による闘いを続けていたドイツ告白教会の牧師たちと比べると、大日本帝国臣民の枠に収まった説教であった。

2) 説教権の自覚、朱基徹

ここではアジア太平洋戦争下の神社参拝強制に対し、第一戒の説教をめぐって神から付託された説教権を強烈に自覚した朱基徹について考える。天照大神と明治天皇を祭神とする朝鮮神宮が創建された1925年、朱基徹は平壤神学校を卒業した。この時すでに神社参拝の強制は始まっており、イエス教長老教会慶南老会は1931年、朱基徹牧師の主導により神社参拝反対決議を行なった。一方、日本のプロテスタント諸教派・団体は1930年、神社制度調査会に「神社問題に関する進言」を提出し、神社が宗教であるなら参拝を強制しないことを、神社が宗教でないなら宗教的要素を排除することを要望した。しかし、神の言葉が預かる教会の任務として神社を偶像と表明できずにいた。その結果、美濃ミッシェンへの迫害に対しても、朝鮮半島における参拝強制に対しても反対を表明することなく、国民儀礼として神社参拝を受け入れて行くことになる。

1936年5月、朱基徹は金剛山牧師修養会において、マタイ3章1-13節から「預言者の権威」と題してエリヤ、エレミヤの権威を語り、洗礼者ヨハネ、ナタン、ジョン・ノックス、ルターの例を挙げながら、自分の生命をかけて悪を責め、真理を語ることを放棄している牧師の姿勢を厳しく問うた。この朱基徹が平壤の山亭岬教会に就任した1937年、総督府は「皇国臣民の誓詞」を制定し、10月12日の『基督教報』社説は「聖書の説教をもって、国民の義務を十分に説き及ぼせ、その義務を徹底的に実行し」と述べている。

性らしい細やかな観察として語った最後に、壺を破ったのは女性ではなくイエスであると結ぶ、(イエスが彼女にそうさせた!)まことに余韻の豊かな説教である。他は、海老沢亮、今泉貞幸、小崎弘道、額賀鹿之助、芹野興太郎、鈴木浩二、田崎健作、山口金作。日本メソヂスト教会は14名で、前年監督となった釘宮辰生は「ウエスレー師の基督教体験」と題し「基督教者の完全」に至る「新生」を説いている。

日本の官憲は、イエス教長老教会の27回総会に神社参拝を決議させ、早速彼らを平壤神宮に参拝させた。以後、あくまでも参拝を拒否する2000人が投獄され、200教会が閉鎖、50人が殉教する。先述の説教集『時代と教壇』の精錬された説教には、時代に対する説教による闘いの期待はある。しかし、その時はすでに来ているとの自覚がなかった。多田素は先述の説教を以下のように締め括っていた。

「故に日々の生活に於いて、どうか世の人々と妥協せず、汎神論的な思想、信仰、宗教行事に卷かれぬ様に努力しなければならない。我々の先人は此の為に、迫害せられ、傷つけられ、牢獄に投ぜられ、殺害せられたのであったかもしれない。然し今日の教会は、その人たちの血潮を以て建設されたものである。生命がけで此の使命を守って行きたいと思ふ。『主の御霊我に存す』主の御霊を授けられ、我々は此の栄光の道を完うしたのである。」

1941年、日本のプロテスタント教会は、「大東亜戦争」遂行のための国民総動員の一端として日本基督教団を成立させた。「教団規則」第七条「生活綱領」は「皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ各其分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」である。「聖書に従って」と言うべきところを「皇国の道に従って」としたことは、プロテスタント教会として致命的な過ちであった。

1940年9月のある主日、警察が山亭岬礼拝堂を包囲し、朱基徹の説教を禁止した折のやり取りが以下のように記録されている。

警察官 今日から説教するな。

朱牧師 私は説教権を神様から受けたのであって、神さまがするなとおっしゃればやめるが、私の説教権は警察から受けたのではないから、警察からするなということではない。

警察官 禁止したにもかかわらず説教するなら逮捕するぞ。

朱牧師 説教するのは私がすること、逮捕するのは警官がすることだ。私は自分がすべきことをする。³⁶

³⁶ 井田泉「神社参拝問題と朱基徹の説教」『キリスト教と歴史』新教出版社、1997年、220頁。「金隣語によれば、これが朱基徹牧師が山亭岬の講壇に立った最後であったという。彼は「当日これを目撃し、その説教を聞いたけれども、余りに緊張したため説教の御言葉を筆記することができなかった」と述べている。数日後、

ここで「皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ」という態度と「私は説教権を神様から受けた」と説教者の自覚を対比し、説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションという観点から考えるところなるだろうか。朱基徹は殉教に向かう説教によって殉教し、戦後の韓国教会史に決定的な影響を与えた。

日本基督教団「生活綱領」は、殉教を殉国と言い換えたことで目先のコミュニケーションに成功したように見えるが、神のことは伝達に失敗し、トランスフォーメーションにおいて致命的な失敗をした。結城晋次は、この時期の両国のキリスト教を比較して「公信性」を獲得した韓国のキリスト教と、これを失った日本のキリスト教を対比している³⁷。

説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションというテーマで、なぜこのようなことを語るのかといふかしく思われるかもしれない。しかし、日本のプロテスタント教会史におけるこの挫折は、神のことばの説教における敗北であったことを真摯に反省しなければならぬ。それは戦後の教会史のみならず、説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションを語る上での出発点でもある。

3) 戦後の福音主義教会の連続講解説教

1946年1月16日、浅野順一は美竹教会の礼拝において「然りと否」という説教をした。彼は、出エジプト記20章3節とローマ人への手紙6章2節から信仰により「否」と言う責任を語る。

「此の度の戦争に於ける日本の惨めな失敗を思ふ時、戦争前及び戦争中然りと唱へる者が余りに多く否を叫ぶ者が余りに少なかつた所に原因がありはしな

朱基徹は検束された。そして彼は二度と生きて山亭岬に帰ることはなかった。拷問による衰弱の果て、彼が平壤刑務所で息を引き取ったのはそれから三年七ヵ月後の一九四四年四月のことであった」

³⁷ 結城晋次「朱基徹牧師との出会い——日韓交流で学んだこと」、信州夏期宣教講座編『韓国強制併合から100年』いのちのことば社、2010年、229—230頁

かったか。最初は良心的に否を唱へた者も大勢に抗し得ず権力に圧倒されて否を然りに言い換へるに至った。³⁸

「皇国ノ道ニ從ヒテ信仰ニ徹シ各其分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」と「生活綱領」にうたった事態こそ、「否」を言うべき重要な場面であったというところであろう。

浅野の説教を含む18編の説教は、1945年12月25日から毎月2編ずつ各4000部発行された後、1947年12月25日に合本『現代説教選』として新教出版社から発行された。山谷省吾「新日本建設の原理」に始まる各説教は、どれも格調高く新日本建設の原理としてのキリスト教を語っている。時あたかもキリスト教ブーム到来の時節であった。その中で田中剛二の「キリストとの共同嗣業」は、キリスト教に順風が吹き始めたことを安易に喜ぶことを戒め、ここにも悪魔の攻撃があると説き、キリストの苦難を共に嗣ぐ教会であるべしと説く。

「我らが苦難について我らの分を受けなければ、天国の栄光と云ふ共同嗣業にも与ることはできない。苦難にあつての信仰の忍耐こそは、キリストに接がれたもの、地上の栄光であるからである。暴風の中に主と共に戦ふものが、平和の日に主と共に冠を受け、暗黒の中に主と共に往く者が、光の中に主と共に楽しむことが出来る」

田中は徹底して聖書本文を主とし、説教者を後退させる形の連続講解説教を実践した。

「どのような意味でも説教者の説教は自分自身を示し、伝え、語ることはありません。そこで語られているのは神の言葉、福音であります。その説教者において神の言葉が語られていなければ説教はありません。その意味では、説教において、説教者の場所はないのであります。」³⁹

これは日本キリスト改革派教会の説教に大きな影響を与えることになる。

日本基督教団には竹森満佐一から加藤常昭に継承される連続講解説教の伝統がある。こちらは信仰経験を語ることを含む広さを持っており、やはり大きな

影響を与え続けている。2009年7月8日・9日の両日、パシフィコ横浜において日本プロテスタント宣教150年記念大会が開催された。9日の基調講演において加藤常昭氏は、説教の観点から150年を振り返り、戦時中の教会は無様だったが、それでも神の言葉を語り続けた牧師たちがいたことを忘れないでほしいと語り、日本の教会が最も悔い改めなければならないことは、キリストのからだである教会を勝手に扱ってきたことであるとし、キリストの教会をキリストにお返し下さいと結んだ。⁴⁰

日本キリスト教会では、渡辺信夫のカルヴァンに倣う連続講解説教が多くの教職に継承されている。戦前にはなく、戦後の日本プロテスタント教会において一般的となった連続講解説教は、戦時下における説教の挫折、すなわち神の言葉を私（日本化）したことへの反省、日本の説教史における反省に基づいていると考えてよい。

以上、戦時下における「説教の敗北」との関連で戦後の説教について述べて来た。これとは別に、そして歴史的な反省以上に戦後の説教に影響を与えたのは、聖書学を中心とする説教のための神学の進展と戦後の教会のあり方である。

聖書学の進歩、辞書や注解書の充実に伴って説教者の釈義力は向上し、主観を避けてより厳密な釈義説教をするために連続講解説教という形が志向された。1973年からの『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ』（日本基督教団出版局）は、1993年に『アレテイア』、2004年からは『説教黙想アレテイア』と書名を変更して今日に至っている。

戦後の福音派は、聖書を誤りなき神のことばと信ずる信仰のゆえに聖書の原典釈義を重んじ、「聖書の説き明かし」としての説教に努力をして来た。たとえば1949年10月16日創設の東京基督神学校の「開設の趣旨」は以下の通りである。

「一、神の栄光と福音宣伝のために、敬虔と奉仕と祈りの生活に専心し、この世と妥協せず、神の御言に忠実に従う伝道者を養成する。二、聖書をギリシ

³⁸ 浅野順一『然りと否』（現代説教選8）新教出版社、1946年4月25日。この説教において浅野は「今時の戦争に於て最も大きな否を叫んだのは誰であろうか、畏くも天皇陛下である」という。全く頂けない。

³⁹ 「説教者パウロ」田中剛二著作集第4巻『説教集』新教出版社、1986年、353頁

⁴⁰ 加藤常昭「神の言葉に生かされるキリストのからだ・教会」日本プロテスタント宣教150周年記念実行委員会編『キリストにあつてひとつ』日本聖書協会、2010年、195-207頁

ヤ語、ヘブル語の原語によって、その正確な意味を把握し解釈しうる伝道者を養成する。」

ここから東京基督神学校と聖書神学舎（現聖書宣教会）が発祥した⁴¹。両者はそれぞれの発展を遂げるが、この「開設の趣旨」は継承されている。東京基督神学校の一期生で2009年に召天した小畑進は、戦後の福音派の指導者たちがそうであったように戦争体験、明確な回心と聖書信仰、求霊の情熱を併せ持った説教者だった。私は小畑の『詩篇講録』について以下のように評したことがある。「奇抜な学説がこれ見よがしに陳列されているのとはわけが違う。古代イスラエルの信仰詩が、日本人のことばで読み解かれる快感！ 役目を終えた講解は退いて、各篇の詩情が独自のものとして脳裏に刻まれる醍醐味！」⁴²。

もう一つのこととして戦後の教会のあり方にふれておく。1959年の「宣教100年記念大会」において渡辺善太は「日本プロテスタント宣教百年の回顧と展望」と題して講演した⁴³。渡辺は、日本の教会に対する二つの問いを紹介する。一つはエミール・ブルンナーの「百年かかって日本プロテスタントは四十万人の信者しか獲得できない。日本全人口の二分の一パーセントしか信者を得られない。これはいったいどういいうわけか、教職としてのあなた方は、安閑としているべきではないだろうか？」というもの。もう一つは、スタンレー・ジョーンズの「日本に来て、教会を回って見て、牧師諸君とつき会って感ずることが一つある。それは教会の牧師が積極的に進出するということよりも、自分のまわりに少なくて五人、多くて二十人くらいの青年を集めて、その指導に力を尽くしているという現象ですが、これは私には不思議でならない」。

これら二つの問いに対して渡辺は、日本宣教は現代世界に類例のない「神なき近代日本独特の文化」を相手にしている、そこでは小崎弘道や植村正久の路

⁴¹ 1949年10月に開校した東京基督神学校は1951年5月に日本基督神学校と東京神学塾となり、東京神学塾は1958年5月に聖書神学舎となる。『東京基督神学校草創期史』東京基督神学校、2003年

⁴² 小畑進『詩篇講録』（いのちのことば社、2007年）の書評「一日一篇、ゆっくり味わいたい」『いのちのことば』2007年11月号

⁴³ 『日本キリスト教宣教百年を記念して——宣教百年記念大会記録』日本基督教協議会、1960年

線、すなわち福音主義と教会中心主義を重視し確実に信徒教育をする必要がある」と答えた。

戦後のプロテスタント教会は、主流派も福音派も確実な教会形成をめざして来たと言つてよい。これは歴史の反省をふまえた教会の成熟と考えられる。信徒も釈義に優れた説教を期待するようになり、それに呼応して連続講解説教が多くなされるようになった。これは説教において戦前にない特徴である。そして、確実な教会形成の志向はその一面で教会を内向きにすることにもなる。

Ⅲ. 福音主義教会における説教の現在

戦後の福音派の説教は、誤りのない神のことばである聖書の権威を共通の基盤としつつ、その方法においては多様である。戦前の純福音派から継承された回心とよきめをめぐり明瞭で大衆的な主題説教があれば、厳密な原典釈義に基づく講解説教もある。戦前戦中の教会のあり方に対する反省に聖書学の進展が加わり、戦後の福音派の説教は育まれた。明治から大正期の説教が持っていた伝道力は、後発の福音派教会において、主流派におけるそれ以上に発揮された。

ところがその伝道力が弱くなり、説教の伝達力と変革力も弱くなって来ていると思われる。説教におけるコミュニケーションとトランスフォーメーションは、いつの時代にも課題なのであるが、今日その課題は新しい様相を示している。それは説教者の釈義力の向上と確実な教会形成にも関わらず現代の教会を覆い始めているように思われる。キリスト教に関する一般的知識が増して社会も成熟し、相対的にキリスト教の説教のポテンシャルは低下した。信徒や牧師の子弟である説教者は安定性と引き換えに信仰体験における迫力に欠ける。ポストモダンとグローバル化の中の多様な価値観と相対主義により強い主張をしなくなったことに加えて、新しいジェネレーションにおける聴く力の低下、理性より感性を大切にする傾向などがある。聴く力の低下には情報のスピード化と映像化の影響があるだろう。そこでは短い単純な説教が期待されるようになる。韓国教会やメガチャーチの増加はこの傾向を裏付けると共に加速させている。

そこで求められるのが新しい世代の会衆とのコミュニケーション能力であり、グローバル化の中での異文化理解である。都市部ばかりでなくあらゆる地域教会においてこれが求められている。旧来のレトリックが通用しなければ、より今日的なレトリックを会得することは、説教においては禁物ではなく責任である。そして今日の説教においてコミュニケーションやトランスフォーメーションが課題であるということは、そこに突破口があるということでもある。この時代にあって神のことに聴くこと、きちんとした意義をふまえて実践の中で聴くことが大切である。説教者が主に聴いていることしか会衆には伝わらず、説教者を生かさなないことばは会衆を変革することもない。

あとは具体的な伝達の手段であるが、説教を聴く訓練を充分に受けた会衆は、互いに教え合ったり、あるいは実践の中で聴くことが大切であろう。説教を一方的に聴き続けるだけでなく、さまざまな交わりの中で聖書を読むリーダーとなることが期待される。

説教においてパワーポイントで映像や音楽を用いなければならないとは思わないが、否定することは間違っている。子どものための紙芝居のような聴き手の適応と考えると良いだろう。落語家が映像を使えば手抜きとされ、話芸の貧弱を笑われるだろう。説教者も準備の手抜きや貧弱さを安易な代用品で補うのではなく、神のことに聴けるための配慮としてこれを用いるべきである。説教は話芸としての完成度を追求するのではなく、福音が確実に伝達され変革が起こるために仕えるべきである。コミュニケーションが難しいならば、説教者が従来に勝る努力をするのが当然であり、聴く耳のある者は聴けというのはその努力の後に言うべきことである。

おわりに

日本プロテスタントキリスト教史における説教の始まりは、キリシタン邪教観との対決であり、キリスト者の新しい生き方に証されつつすべての人のために語られた。そうした先達の説教の中から、奥野昌綱の確信と努力に学び、小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、植村正久らの人格を通して語る説教を振り返った。内村鑑三、山室軍平にはすべての人に語ることを学んだ。戦時下の教会の説教はコミュニケーションとトランスフォーメーションにおいて大きな過

ちを犯したが、戦後の教会は釈義力を高めて確実な教会形成をめざした。これらのことを田中剛二や竹森満佐一の連続講解説教から考えた。

戦後の説教は、一般の文学や言論に与える影響も社会変革を進めることにおいても力を落としたが、福音派においては人を救う力のあることばが比較的良好に語られてきた。確実な教会形成をめざす説教が、それゆえに内向きになっていることを深刻に受け止め、すべての人のための神のことに聴きにふさわしく語ること、新しい世代に語ることを今日の課題として考えた。神のことばの伝達を助け給う聖霊に期待し、人をトランスフォーメーションする神のことばの力に信頼して、説教のためになすべき努力を惜しまない教会と説教者となりたいと願う。

(東京基督教大学教授・研究科委員長)